

教員のためのスタディーツアー

去る 6 月 30 日、山形大学のチームの企画で、石巻市と東松島市で「石巻スタディーツアー」が行われました。このツアーは、山形県内の小中高校の教員を対象として開催されました。

このツアーの目的は、災害が起きた時にどのような問題が発生してそれをどうやって解決するか、ということを経験した先生に聞くことでした。

もうひとつは、震災時に石巻で何が起きたか、そして現状と復興に向けた活動を身近に感じてもらうために「まち歩き」をすることです。

私たちは、迎える準備をするために少し早く大曲小学校の理科室に集合して会場のセットを手伝いました。そこで校長先生がペットボトルの水を持ってきてくれました。「おもてなしをしたいけれど、これが精一杯で、これも支援された物で、支援された冷蔵庫で冷やしたもの」だと教えてくれました。

参加者の方々と一緒に、大曲小学校で話を聞きました。少し経って、校長先生から少し話がありました。11 人の児童が亡くなり、その内 2 人は未だに行方不明だということ。行方不明になっている 2 人の児童の家族の方が、最近になって死亡届を出されたということを知りました。また、たまに外を見ると被災したことを忘れてしまいそうになるけれど、現状はまだまだ元に戻っていないということでした。

次に、被災当時に指揮を執っていた先生の話を知りました。津波の激しさ、被災した日の晩に起きたこと、その後の避難所運営や様々な支援を受けた話を聞きました。大曲小学校では、長い人で 4 日間学校に留まって避難所運営を続けた先生もいたそうです。

児童への影響は現在、64%が就学支援を受けている状態で、保護者は 4 分の 1 の方が離職されてしまいました。38 人の児童とその家族は転出して、人数は減ってしまいました。しかし児童は前向きになってきていて、不登校の子はいないということです。

話を聞いた後は、学校内を少し見学しました。未だに残る津波の跡や、復旧中の教室を見てから外に出ました。外のフェンスはまだ曲がっていました。

津波の跡や、修理中の教室を見て先生たちは写真を撮ったり、説明に興味深そうに聞いていました。

大曲小学校を後にして、私たちは車で日和山へと向かいました。ここでは門脇町の方向をながめながらスタディーツアーの主催学生の説明を受けました。その

後に参加者の方は門脇小学校まで降りました。そして全員で「がんばろう石巻」の看板のところまで歩いて、1 分間黙祷をしました。

この看板の向かいにはテントで作ったお店があります。そこで各々店の人に話を聞いたり、買い物をしたりして過ごしました。

昼食を食べた後、石巻市役所を出発して、街の人の解説を聞きながら石巻の商店街を「まち歩き」しました。まち歩きでは駅前の商店街の中にある「石巻立町ふれあい商店街」や、旧北上川沿いにある「石巻まちなか復興マルシェ」など街の中を歩いて回りました。

次の目的地のピースボートセンターでは、被災時の石巻の様子を 6 人の方に語っていただきました。その後質問など情報交換も行われました。

ことぶき町商店街の近藤さん、ピースボートの小林さん、石巻好文館高校の校長先生、女川第一中学校の当時の校長先生、門脇小学校の先生、そして、再度大曲小学校の先生から話を聞きました。

その中で私が 1 番印象に残っている話は、津波が来たときの門脇小学校での話です。

門脇小学校の生徒が山に逃げた後、先生たちは生徒に津波を見せないようにしていたけれども、自分の家が流されるところを見てしまった生徒がいたという話は、すごく生々しい話でした。

最後に、私は今回このツアーに参加して思ったことは、学校の先生たちが常に真剣に聞いていて、責任感の強さに驚きました。この先生たちが、もしも自分で働いている地域で災害が起きたら、ということを考えてながら行動している姿を見ていて、とても頼もしく感じました。

(菊池 駿)



震災後に植樹された木(大曲小学校)

地域に根差す～石巻信用金庫～

地域に根差した活動を行っている金融機関は企業の被災と復興の状況をよく把握しているはずと考えた私たちは、7 月のある日、石巻信用金庫復興企画課の方から、震災後の同金庫の活動についてお話を伺いました。

お話の中には、信用金庫の果たす役割の説明がありました。日本の大企業を支えている中小企業のための金融機関である石巻信用金庫の果たしている機能・役割・使

命は重く大きいものだそうです。また、もっぱら営利活動を行う株式会社と少し異なる社会的役割をもつ金融機関であり、地域のために働くことがその使命であるとのことでした。職員も地元の方がほとんどです。

石巻信用金庫自身、震災により、多大な被害をこうむりました。全壊した店舗、床下浸水した店舗、半壊した店舗などがありました。

仕事を再開するうえで当初問題となったのは、しばらくはコンピュータが復旧できず、お客様の残高を確認できなかったことでした。通常営業を再開したのは、二か月から半年以上もかかりました。

このような状況の中、石巻信用金庫は、被災したお客様が生活資金に困っているという判断により、残高確認ができない状況でも、10万円まではお客様の希望額通りに預金の引き出しに応じました。

後日、コンピュータが復旧し、残高の確認ができるようになった時、お客様が皆、ご自分の保持する残高の範囲で預金の引き出しを行っていたことは、「美談」と呼べることだと思います。地域に根差した活動による信頼関係が、このような形で現れたのかもしれません。

石巻信用金庫が震災後に行った取り組みは、信用金庫業界役職員からの募金、同役職員によるボランティア活動、子供向け支援活動、被災企業への販売促進支援活動、石巻信用金庫による地域支援活動、産学金連携による地域支援活動など多岐にわたります。このような活動で、信用金庫は地域にさらに深く根差したと考えられます。

震災が起きてから、風評被害などの影響はあり、石巻から離れる人たちが多くなってしまったことは事実です。地域の伝統産業である水産加工業などは、被災の程度が大きく、地盤沈下も起こっているなど、事業環境が大きく悪化しています。

しかし、石巻から離れることなく、地域を支え続けている中小企業もあります。石巻が衰退することは、地域と共に成長している信用金庫の衰退にも繋がります。信用金庫はコミュニティーを大切にし、人と人を繋げる役割をしています。このような役割は震災後も変わらないはずです。

このような状況だからこそ、信用金庫のような活動を通じて、地域のみんなが石巻の復興に力を合わせなければならないと思います。私たちも協力できることを探さないといけません。

(金野千春、工藤達也)

ボランティア活動の変化 ～サークル「NEXT」の経験から～

東日本大震災は、私たちが大きく変える大きなきっかけになりました。震災が起こって数カ月、ニュースをみても新聞を見ても震災の事が大きく取り上げられるなか、被災地石巻という注目を浴びた地域の学生であった私たちは何かをしたい、という気持ちを抱えながらも何も行動を起こすことができませんでした。

その時、ボランティアサークルを結成するために協力してくれないかという声がかかりました。自分たちでできる事をやりたい、石巻でボランティアをしたいという強い気持ちの元、立ちあがったのがボランティアサーク

ル『NEXT』でした。結成当時からそのメンバーであった私たちはボランティアを通じてたくさんの事を学ぶことができたと感じています。

このサークルは昨年7月に結成され、当初炊き出しや物資配給を行いました。が、10月を過ぎるころにはボランティアを行う内容が大きく変わりました。徐々に仮設住宅が増えたことが大きな理由となり、炊き出しと配給を減らしました。

いつまでも続けてほしい、そう被災者の方がおっしゃったことがあります。ですが、このまま配給をし続けることが本当に正しいのかと私たちは考えました。私たちボランティアの思う被災地復興は元の生活に戻らなければならない被災者の方の手伝いであって、立ち止り頼りきりにさせるボランティアにはなりたくないという思いを、ボランティアをしていたたくさんの人たちが感じたからでした。

活動の中から配給が減り、アンケート調査に移り変わったのはその頃からです。アンケート調査とは、在宅避難者のために一軒一軒回り、高齢者だけの世帯か、家族の生活状況で困ったことがないかなどを調査するものでした。この調査をすることによって、精神的なサポートや高齢者の話し相手になることができました。在宅避難の方と言葉を交わすことによって、震災前よりも人と人のつながりが大切だと思いました。

現在では、農作業と仮設住宅の生活調査を主に行っています。農作業は協力しているNPO法人の「ソーシャルファーム」という事業からの依頼でジャガイモ畑を耕したり、選別をしたりなど活動しています。仮設住宅の生活調査は国からの依頼で在宅避難者と同様にアンケートをとり、高齢者などの巡回にあたっています。

時間がたつにつれボランティアの需要が変わるため、活動も様々な形に変化して対応していくことが何より大切だと感じました。

(鈴木愛佳、小沼芙実、佐藤美紀)

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail senshu-maruoka@inter7.jp